



2010年11月3日放送

印象に残る症例①

丸の内クリニック 産婦人科 丸山 綾

OLさんのQOL改善に帰脾湯

西洋医学にはない漢方医学の概念として、“未病”という言葉があります。“未病”とは、現時点では病気ではないけれども、病気の一步手前の状態であり、治療によってそれが発病せずに健康を取り戻せる、というものです。ですから、心身の体調不良を自覚していても、検査データ上は異常なしということも起こります。また検査上の異常はなくても、体調は優れない訳ですから当然QOLも低下します。この“未病を治す”ということが、漢方治療の得意技のひとつだと思いますが、今回はその未病を治し、QOLを回復させた一症例をご紹介します。

私の勤めるクリニックは、都心のビジネス街という場所柄、患者さんは20代から40代のOLさんがほとんどです。仕事にプライベートにと充実した生活を送る一方で、様々なストレスから心身の体調を崩す方も少なくありません。そんな一人、症例は38歳のA子さん、近くの企業に勤めるOLさんです。主訴は、“なんとなく体調がわるい”。既往歴・家族歴は特にありません。現病歴です。ここ4ヵ月ほど体調が優れず、昼間はまだ良いけれども、特に夜になると眩暈や吐き気を強く感じます。また以前は週3回通っていたスポーツジムに、最近は疲れて行けなくなってしまったと言います。昼間は、仕事を休むほどではなく、

仕事自体はほぼ通常通りにこなせているとのこと。会社の診療所で精査をしても大きな異常を認めず、ココロの病でしょうと言われ心療内科の受診を勧められました。納得はできるものの気が進まず、最近では月経周期も延びがちなので、“とりあえず、一応”婦人科を受診した、という様子でした。初診時の自覚症状です。いわゆる“不定愁訴”で、多岐にわたります。

常に下腹部の鈍痛がある

毎食後に必ずむかつきがある

動悸がする

息苦しさを感ずる

軽いめまい

手足のしびれ

肩がものすごく張る

月経の間隔が延びてきた

疲れると気持ちがわるくなる

落ち込む

よく眠れていない

夜になると調子がわるくなる

買い物に行っても疲れてしまう

というような状態で、週3回通っていたスポーツジムに、疲れて行けなくなってしまったのがつらい、との訴えでした。

当院受診までの経過ですが、会社の診療所で検査したところ、ヘモグロビン9.7g/dlの軽度の貧血を認めました。上部消化管内視鏡では胃潰瘍痕のみ。胃薬と鉄剤を処方されましたが症状改善は見られませんでした。当院婦人科での所見です。月経周期は35-38日型と延長傾向はあるものの正常範囲内。直径3cm大の子宮筋腫を認めますが、以前と比べて増大傾向はありませんでした。以上より西洋医学的には自律神経失調症と診断しました。現症です。身長158cm、体重47kg、体温36.6℃、血圧110/74mmHg、顔色不良、眼瞼結膜は軽度貧血を認めます。体格は中等度で、冷え・のぼせや発汗はありません。嘔気のため食欲は低下しています。2便は正常。下腿浮腫認めず。不眠があります。腹候は腹力軟、腹直筋攣急や腹部動悸はありません。脈候は極めて沈で細で弱。舌候は乾燥傾向があり紅、薄い白苔と、軽度の舌下静脈の怒張を認めました。治療経過です。気虚および血虚に不眠を伴うことからツムラ65番・帰脾湯エキス剤1日7.5gを分3で処方しました。2週間後、腹痛がなくなり、嘔気も2週間で1回のみ。落ち込む頻度も減りました。またスポーツジムに行ってもあまり疲れなくなるとおっしゃいます。よく効いているようでしたので、そのまま内服継続としました。そしてさらにその1カ月後に来院された時には、すべての症状がなくなり、夜もよく眠れるようになりました。“スポーツジムにもこれまで通り週3回行けるようになりました”と笑顔が見られました。また、“嘘のようによくなった”、“漢

方薬がこんなに効くとは思わなかった”ともおっしゃっていました。念のためさらに1カ月分ほど帰脾湯を処方して治療終了としました。体調が良くなったこと以上に、スポーツジムに元気に通えるようになったことに対して、とても喜んでいたのが印象的でした。

考察です。今回使用したツムラ65番、帰脾湯についてです。まず使用目標ですが、効能または効果としては、虚弱体質で血色の悪い人の次の諸症：貧血、不眠症とされています。漢方的な適応病態としては、元来胃腸が弱い人が、心身の疲労により気血両虚の症状を起こした時に用います。つまり、気虚の症状、たとえば疲れやすい、倦怠感、元気がない、息切れ、食欲不振などと、血虚の症状、たとえば貧血、頭がふらつく、めまい感、動悸などを認め、それら気血両虚に加えて不眠、健忘などがみられる時に用います。また下血、不正出血などの出血傾向を伴うことが多いとされています。婦人科的には、子宮筋腫の患者に適応患者が多いといわれています。ひとことと言うと帰脾湯の特徴は、気血両虚の症状に、多かれ少なかれ精神症状を伴っている、ということです。今回の患者さんは、まさしく帰脾湯の適応に当てはまっていたと思います。上部消化管内視鏡検査で胃潰瘍の痕があったことから、もともと胃腸虚弱がありました。そこへ、疲れやすく、倦怠感があり、嘔気や食欲低下など気虚の症状と、実際に鉄欠乏性貧血を認め、顔色が悪く、めまい感、月経周期の延長など血虚の症状があり、加えて不眠や落ち込みなどの精神症状を認めました。このため帰脾湯が著効し、内服2週間後にはアフターファイブの楽しみであるスポーツジムに通えるほどに回復しました。

さて帰脾湯が、精神症状を伴う気血両虚の状態になぜ効果があるのかを、生薬構成をみながら考えてみます。帰脾湯は全部で12種類の生薬から構成されます。それらは大きく3つの働きに分かれます。まず、人参、黄耆、白朮、茯苓、甘草には、補気健脾作用、つまり気を補い、胃腸を整える作用があります。特に人参と黄耆は、体力と免疫力を高める、すなわち補剤の代表として、その2つの生薬を含むものを、参耆剤（じんぎざい）と呼んでいます。次に、竜眼肉、酸棗仁、遠志、当帰には、養血安神作用があります。血を補い、精神を安定させる作用です。そして木香、生姜、大棗には理気作用、つまり気を巡らせる働きがあります。これらの組み合わせによって、気血両虚と精神症状に効果を発揮します。

このような気血両虚に用いる薬を、気血双補剤といいます。帰脾湯を含めて4方剤ありますが、いずれも補気剤である四君子湯つまり人参・白朮・茯苓・甘草の組み合わせを含んでいるのが特徴です。では4方剤それぞれの特徴をみてみましょう。まず、気血双補剤の代表は十全大補湯です。十全大補湯の構成生薬は、先程の四君子湯と、補血剤である四物湯—すなわち地黄、芍薬、川芎、当帰の組み合わせからなり、それらに黄耆と桂皮が加わります。気虚と血虚をバランスよく補いますが、精神症状はあまり認めないというのが十全大補湯の特徴です。2つ目の人参養榮湯は、十全大補湯から川芎を抜き、五味子・遠志・

陳皮が加わります。このことにより十全大補湯の気血両虚に加えて、精神症状や咳嗽のある方がその適応となります。3つ目の帰脾湯の生薬構成は先に述べたとおりですが、その特徴としては、同じ気血両虚でも、どちらかという気虚より血虚が強く、また不眠や健忘などの精神症状を伴うことです。シンプルに表現すると帰脾湯のイメージは、まず貧血ありき、プラス不眠です。最後ですが、4つ目の加味帰脾湯は、その名の通り帰脾湯の加味処方です。帰脾湯に柴胡と山梔子が加わることにより、帰脾湯の証で、かつイライラやのぼせ感など熱状を伴う場合に用います。

まとめです。女性は月経があることから、比較的虚血になり易いといえます。加えて過度のストレスなどから気虚に陥り、結果として気血両虚の状態というのもめずらしくありません。女性の漢方処方というところ、3大処方と言われる【桂枝茯苓丸】【加味逍遥散】【当归芍薬散】が有名ですが、今回用いた【帰脾湯】などの気血双補剤も、使いやすい方剤かと思えます。さて、気血両虚を補ってQOLを回復させたA子さんですが、その後は年に数回、大好きなスポーツジムに行けなくなると来院され、【帰脾湯】で気血を“チャージ”して元気になられていることをご報告しておきます。